

『正法眼蔵』は、大変難解な書物として知られています。  
それを著した道元禅師は、厳しく近寄りがたい印象を抱かれがちです。

しかし、道元禅師は、そのような人ではありませんでした。

『正法眼蔵随聞記』という書物があります。  
これは、弟子の懐装禅師が、折にふれて語られた道元禅師の言葉を記録したもので  
す。ですから、『随聞記』に書かれているのは、道元禅師の肉声であるといえます。

例えば、

「言葉を発する時には、それが自分や他の人達にとって良い言葉であるかどうか、  
三度顧みて、語るべきです。もし自分や人の為にならないならば、語ることをやめ  
なさい。これは、すぐにはできないことだから、常に心がけて、徐々にそうできるよ  
うにしていきなさい」と語り、またある時は、

「人はたいがい、善いことをするときには人に知ってもらおうと思い、悪いことを  
する時には知られないようにするけれども、善いことはひそかに行い、悪いことをし  
てしまった時には、おもてに現して、反省しなければなりません」とおっしゃってい  
ます。

とても具体的だと思いませんか。

道元禅師は、弟子たちが少しでも良い仏道修行、ひいては良い生き方ができるよう  
にと、常に心を砕き、ご自分の体験やお経に書かれていることなどをもとにしながら、  
懇切丁寧に言葉をかけておられたのです。

そこには厳しく近寄りがたい表情はなく、穏やかな表情があったであろうことが、  
想像されます。

もちろん、優しい言葉だけではなく、修行への覚悟を迫る言葉も語られています。

「私たちはいつか死ぬ存在である、ということを思いなさい。時を空しく過ごすこ  
となく、無用なことに心をとらわれず、ただ修行のみに集中しなければならない。」

また、「時間が空しく過ぎていくのではない。私たちが、空しく生きているのである。いたずらに時間を過ごさず、修行に全身全霊でとりくみなさい。」

道元禅師は、修行に厳しく真剣であると同時に、深いやさしさをたたえた、魅力ある人だったのです。